

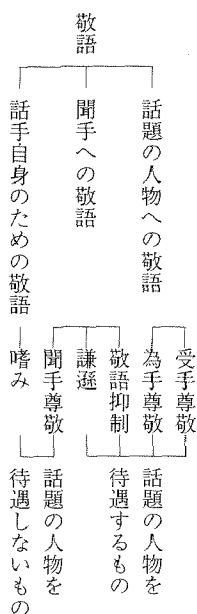
渡辺実の「敬語体系」の分析

盧 頭 松

一 はじめに

渡辺実氏は『国語構文論』において、敬語現象は決してそれ自体文法現象ではなく、常体・敬体というような文体の差、あるいは男性語と女性語との関係に類した位相の差であると考えるべきだとし、最後に「敬語体系」と題する附説を設け、現代日本語の共時態における敬語現象を取り上げている。⁽¹⁾

その中で、渡辺氏は、敬語体系に関する従来のいわゆる尊敬語・謙讓語・丁寧語の三分説および時枝誠記の「詞・辞」説による敬語観を批判し、結論として、現代日本語における敬語の全体系は、



のような関係に整理されるべきだと独自の見解を示した。
本稿では、はたして敬語現象が文法現象であるかどうかはさておき、右の敬語体系そのものを概観・分析しながら、筆者の考えを述べてみたいと思う。⁽²⁾

二 話題の人物への敬語

渡辺氏は、話題の人物への敬語を「話し手が話題の受手に対して抱く敬意を表す敬語」と「話し手が話題の為手に対して抱く敬意を表す敬語」とに分け、前者を「受手尊敬」、後者を「為手尊敬」と名付けている。従来の三分説が敬意の表し方を中心にした分類であるのに対し、これらは、敬意の向けられる対象を中心にした分類で、特に「受手尊敬」の発想は、渡辺敬語論の根幹をなすものと言える。

1 受手尊敬

渡辺氏は、
① A 先生はこの町は初めてだから、B 子さんがご案内申し上げ

ることになったの。(B子は話手のクラスメート。行為をする方の人物を「為手」、行為を受ける方を「受手」とする。)

という文を例にあげて、傍線の部分の「ご案内申し上げる」のような敬語は、従来の常識的な敬語観では、「謙譲」すなわち為手B子が受手A先生に対して取るへりくだった気持ちを表したものと理解され、また、時枝の「詞・辞」敬語観では、為手B子と受手A先生との身分の上下関係を示すものと理解されてきたが、正しくは、為手のへりくだった行為を表したり、素材と素材との上下関係を示したりするものではなく、「話手が話題の受手に対して抱く敬意を表す敬語」と理解しなければならぬとし、これを「受手尊敬」の敬語と呼んでいる。

その根拠として、もし①の例文と同じ話題を受手A先生の同僚が話したとすれば、

② A君はこの町は初めてだから、B子が案内することになった
そうだ。

のようになって、敬語が消滅してしまうという事実をあげている。すなわち、為手B子は受手A先生を敬うべき身分の関係にあるのだから、その「案内する」という行為は常にへりくだった行為でなければならず、また、A先生とB子との師弟の関係はこの場合決定的なのだから、話手が誰であるかにかわりなく、その関係の規定は常に敬語として現れるべきもののなのに、場合によっていわゆる「謙譲」の敬語・「素材と素材との関係の規定」を示す敬語が、用いられたり用いられなかったりするこのような事実とは、

「謙譲」あるいは「素材と素材との関係の規定」と解釈する立場からは、まったく説明できず、したがって①における敬語を従来の常識のように「謙譲」の敬語と解し、時枝のように「素材と素材との関係の規定」を示す敬語と解することが、そもそも解釈として正当でないことである。

要するに、「ご案内申し上げる」という敬語が用いられるか用いられないかの相違は、話手の違いによって生ずる相違、つまり話手が受手を尊敬すべき立場にあるかどうかによる相違で、このような敬語は話手が受手を尊敬すべき立場にある、という場合にしか使われないのであり、したがって、この敬語の本質は「話手が話題の受手に対して抱く敬意を表す敬語」と理解しなければならぬのである。

渡辺のこのような考え方は、すでに王上琢弥「源氏物語の解釈文法(敬語)」(『時代別作品別解釈文法』至文堂、一九五五)の中に窺われるのであるが、渡辺の説くところ、①における「ご案内申し上げます」のような敬語の敬意は、確かに受手に向けられており、その点に着目して「受手尊敬」と名付けたことは、このような敬語の本質を的確に把握した注目に値する見解と言える。

しかし、「受手尊敬」を説く過程で行われた、「ご案内申し上げます」類の敬語についての従来の解釈に対する渡辺の認識には、いささか疑問に思われるところがある。つまり、渡辺は「ご案内申し上げます」という敬語の本質が、一般に「話題の為手が受手に対して取るへりくだった気持ちを表す敬語、すなわち「謙譲語」」

と理解されているように認識しているようだが、これは渡辺の誤認ではないかということである。この問題に関連して、北原保雄は、

従来の常識的な敬語観では、「謙讓」すなわち為手B子が受手A先生に対してとるへり下った気持を表したものと理解され、

というのは渡辺の誤解で、このように理解している学説はむしろ少ないといった方が正しいが、……⁽³⁾

と述べているが、北原も指摘しているように、それは「「案内申し上げる」」類の敬語の解釈に対する正しい認識ではないように思われる。

実は、「「案内申し上げる」」類の敬語に対し、渡辺の説くような「受手尊敬」の考え方は、すでに江戸時代にその姿が見られる。たとえば、本居宣長『古事記伝・巻七』には、

物語文などに、此方^{コタタ}をも彼方^{カキタ}をも共に尊^{ウツ}みて云ときは、たてまつりたまふと云り、たてまつるは、受^{ウツ}る方を尊^{ウツ}み、たまふは授^{タマフ}くる方を尊^{ウツ}みて、重^{オモ}ネ云なり。(傍線は筆者)

のように記されており、「「案内申し上げる」」と同類の敬語「たてまつる」は、「受^{ウツ}る方」を敬^{ウツ}って言うときに用いる敬語であることを示している。つまり、その敬意の向けられる対象が「受手」であることを表しているのである。もちろん、当時はまだ敬語表現をまとめて体系的に考察するといったような時期ではなかったもので、この記述が敬語体系全体の中における位置づけであるとは

言えない。しかし、個別的な敬語に対する断片的記述とはいえども、その敬語の有する本質の把握においては決して間違っておらず、まさに渡辺の「受手尊敬」に通じるものがあると言えよう。

そして、明治以降、敬語の体系的な研究が行われるようになってから現れた、「「案内申し上げる」」類の敬語に対する松下大三郎の「客体尊敬」・金田一京助の「目的格への敬称」・馬淵和夫の「対象尊敬語」などの考え方も、名称はそれぞれ違うものの、その敬意の向けられる対象を正しくとらえ、それを基準として敬語を分類している点では、本質的に渡辺の「受手尊敬」の概念と脈絡をいっしょにするものと言える⁽⁴⁾。

また、「「案内申し上げる」」類の敬語がいわゆる「謙讓語」として扱われる場合でも、その解釈においては必ずしも渡辺の指摘のとおりではない。たとえば、敬語を称格によって「敬称」と「謙称」に二大別した山田孝雄は、いわゆる「謙讓語」にあたる「謙称」を意義上からさらに「絶対謙称」と「関係謙称」に分け、問題の「「案内申し上げる」」類の敬語が属する「関係謙称」について、

謙称を用ゐる者の、尊敬すべきものに対しての行動につきていふものなり。⁽⁵⁾

という説明を施しているが、これはいわゆる「謙讓語」を単に「話題の為手が受手に対して取るへりくだった気持ちを表す敬語」として認識しているのではないということを端的に示しているものと言える⁽⁶⁾。辻村敏樹はこのような考え方を受け継ぎ、同類の敬語

を「関係下位主体語」と名付けていたが、のちに「下位主体語」を「客体上位語」という用語に改めると同時に、その下位分類の一つとして「客観的客体上位語」という項目を新たに設け、「(一)案内申し上げる」類の敬語を一括して扱っている。

それから、宮地裕も「敬語の解釈―主としていわゆる謙讓語とその周辺―」と題する論文(『国語論集』ことばの研究二、一九六五・三三)の中で、「謙讓語」は、話題の人物間の上下関係の行為の授受の認定を通して、話手が、その上位者の方に敬意を示すことが原則だという解釈を下しているし、また大石初太郎も「待遇語の体系」なる論文(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社、一九七六)において、「(一)案内申し上げる」類の敬語を「謙讓語A」と分類し、その説明として「話題主を低め、その行為の向かう相手方を高める表現のために用いられる敬語」と述べており、両方とも渡辺の認識とは違った見解であることが分かる。

このように、「(一)案内申し上げる」類の敬語に対する解釈は、渡辺の指摘のような「話題の為手が受手に対して取るへりくだった気持ちを表す敬語」という説ばかりでなく、その本質を渡辺の「受手尊敬」と同じように把握している説(その用語はともかく)も多いと見てよいように思われる。

2 為手尊敬

渡辺はまた、話手が話題の人物に対して捧げる敬語として、前述の「受手尊敬」のほかに、

③お父さまは明日の朝6時に出発なさるから、あなたも早く起

きてちょうだい。

の傍線の部分のような、話手が話題の為手に対して敬意を表すものがあるとし、このような敬語を「為手尊敬」と呼んでいる。

そして渡辺は、「為手尊敬」は話題の為手を話手が尊敬するための敬語であるが、為手は受手とは異なって話題の表面に主役として登場する人物であるから、話手が為手に対する敬意を表現するときも、「受手尊敬」の場合のようなまわりくどい間接的手段を通ずることなく、直接に敬意を表現すればすむという単純な敬語であって、従来のいわゆる「尊敬語」とか時枝の「話手と素材との関係の規定」という解釈も、ほぼ「為手尊敬」の敬語としての本質を正確に把握しているものと評することができる。

ただし渡辺は、時枝が「受手尊敬」と「為手尊敬」とを含めた話題の人物に対する敬語に関して、

素材の認識把握の仕方に関するものであつて、その根柢には素材に対する上下尊卑の関係に対する識別が存し、その故にこれ亦敬語と称することが出来るが、ある対象に対して敬意を表現してゐるといふものではない。(8)

と述べている点は、従うべからざる見解であると言わねばならないとし、傍点の部分に対して異見を示しているが、この点においては筆者も同感である。というのは、たとえば、③における「出発なさる」のような敬語は時枝説によると、話手と素材との関係における素材の認識把握の仕方に関するものであって、その根柢には素材に対する上下尊卑の関係の識別が存するだけで、その素

材に対して敬意を表しているものではないということになるが、実は、これは話手が素材との関係の認識に基づいて素材に対する上下尊卑の関係を識別し、その識別に基づいて素材に対する敬意を表現しているものと考えなければならないからである。

その意味では、時枝の「話手と素材との関係の規定」は敬語の本質の把握において「為手尊敬」とまったく同質のものとは言いがたい。

要するに、「為手尊敬」の敬語は、用語はともかくその本質の把握においては従来の「尊敬語」と脈絡をいっしょにするものと理解してよいように思われる。

三 聞手への敬語

渡辺は、聞手への敬語を「話手が自分を為手とする話題を話す時に、為手としての自分の行動を殊更に低く待遇して表現し、それによって間接に聞手への敬意を表す敬語」と「話手が話の場面の聞手に対して抱く敬意を最も直接的に表す敬語」に分けて、前者を「謙遜」の敬語、後者を「聞手尊敬」の敬語と呼び、さらに「話題の人物に対する敬語（受手尊敬」「為手尊敬）」は、聞手に対して失礼にあたる場合にはさしひかえられる」という事実は、間接に聞手を敬う手段であると理解されねばならないとし、これを「敬語抑制」と呼んでいる。したがって、渡辺の聞手への敬語は「謙遜」「聞手尊敬」「敬語抑制」の三種類になるわけである。

1 敬語抑制

渡辺は、「受手尊敬」と「為手尊敬」はともに、話題の人物に対する話手の敬意の表現であるが、話手に受手または為手に対する尊敬する気持ちさえあれば、無条件にこれらの敬語を用いることができるかという点、決してそうではなく、話手に面と向かって話手とともに「話の場面」を作り、話手のその話を聞いている「聞手」がどのような人物であるかによって、これらの敬語が使えたり使えなくなったりするのだとする。

たとえば、③における話手を、為手である「父親」の「娘」であるとする点、このような「為手尊敬」を用い得るのは、聞手が話手の「妹」であるというような場合に限られるのであって、もしも同じ娘が同じ内容の話を、自分の先生を聞手として話す場合には、

④父は明日の朝6時に出勤しますから、……

のように、その「為手尊敬」は省かれてしまうのであり、また、「受手尊敬」の場合も同様で、

⑤お父さまをあなたといっしょにお見送り申し上げますかね。

と、妹を聞手として話すほどの娘なら、聞手が先生である場合には、

⑥父を妹といっしょに見送ろうと思ひまして、……

のように、その「受手尊敬」を省いてしまうことになるのだといふことである。

つまり、話題の人物への敬語を使い得るのは、話手が話題の人

物への敬意を表現しても聞手に対して失礼にあたらないという場合に限られるのであり、もし、話題の人物よりも聞手の方に一層の敬意を示さねばならないような場合なら、話題の人物への敬意をさしひかえるのが礼儀だということである。

そこで、渡辺は、このような「話題の人物に対する敬語は聞手に対して失礼にあたる場合にはさしひかえられる」という事実を、単に聞手への配慮と言うに留まらず、間接に聞手を敬う手段であると理解されねばならないとし、これを「敬語抑制」と呼んでいるのであるが、この考え方は、聞手がどういう存在であるかによって、敬語が用いられたり用いられなかったりする事実を、敬語分類の一つの対象にした点で注目されると言えよう。

しかし、そもそも現代日本語の敬語とは、話手・話題の人物・聞手それぞれの間の人間関係、つまり上下親疎などの関係を認識し、その認識に基づいて行なう表現であるということを考えると、右のような事実は、どういう敬語を使うべきかという「敬語の選択」のレベルではなくて、敬語を使うべき人物なのかどうかという「人間関係の認識」のレベルのもので、敬語運用全般にかかわる問題である。つまり、「人間関係の認識」は、敬語使用のある一部に限る現象ではなく、すべての敬語使用に潜在している一般現象なのである。

したがって、「話題の人物に対する敬語は聞手に対して失礼にあたる場合にはさしひかえられる」という事実は、「人間関係の認識」のレベルで取り扱われる問題であって、これを敬語分類の

一つの項目として立てることには、疑問の余地があるように思われる。もし、例文④⑥における敬語の省略のような場合なら、たとえば身内の者をよその人に言うときには敬語を使わないといったような日本語の敬語の特徴として扱った方がよさそうに思われるが、いかがであろうか。

2 謙遜

渡辺はまた、敬語の中には話手が自分を為手とする話題を話すときに、為手としての自分の行動をことさらに低く待遇して表現し、それによって間接に聞手への敬意を表すものがあるとし、これが文字どおり「謙遜」の敬語であって、たとえば、

⑦ A 先生が見えたら、私がご案内致します。

⑧ 先日東京へ行つて参りました。

などの敬語がそれであるとする。そして、この「謙遜」の敬語は「受手尊敬」とともに、「謙讓」「素材と素材との関係の規定」の敬語であると扱われてきたものであるが、実は、「受手尊敬」はあくまで話題の人物である受手に対する敬語であり、「謙遜」は対話の相手である聞手に対する敬語であって、根本的に性質を異にするものだとする。

渡辺は、この両者が混同されるだけの理由があることはあつたとし、その理由として、「謙遜」の敬語における、聞手に対する話手の敬意を表すために、為手としての話手自身の行為をへりくだった低い待遇で示す点と、「受手尊敬」における受手への敬意を示す手段として、為手を低く待遇する点をあげ、この「為手冷

遇」という手段がこれらの敬語の本質であると誤認されたゆえに、その当然の結果として不当に混一されてきたのだとしている。つまり、両者ともに「為手冷遇」という手段は正しく把握されてきたが、それはあくまで間接に聞手または受手を敬うための手段にすぎないのであって、それが両敬語の本質ではないということである。

要するに、渡辺の「謙遜」の敬語の特徴は、従来いわゆる「謙讓語」として扱われてきたものを、「為手冷遇」という手段によってその敬意が聞手に向けられるという点に注目し、「聞手への敬意の表現」としてとらえているところにあると言える。ただし、「謙遜」の敬語がいくらか聞手への敬意の表現だとしても、その敬意はあくまで表現素材の把握の仕方を通して間接に表現受容者へ示されるものであって、次に述べる「聞手尊敬」、つまり表現受容者に対し直接敬意を表す「です」「ます」などとは区別される点、注意すべきであろう。

渡辺の「謙遜」の敬語と類似した考え方としては、宮地裕の「鄭重語」がある。宮地は前掲論文の「敬語の解釈」の中で、「いたす」「まいる」「存じる」などは、常にいわゆる「丁寧語」を伴い、ことからの表現を通じて、聞手への敬意をあらわす敬語で「鄭重な感じ」を伴う語であるとし、これらの敬語を「鄭重語」と呼んだが、のちに「現代敬語の一考察」と題する論文（『国語学』七二）で、「鄭重語」を「丁寧語」と改めた。

3 聞手尊敬

次に、渡辺は、以上の敬語はすべて話題の人物に対する敬意をひかえたり、格上げしたり格下げしたり、進んでへりくだらせたりするとかの、人物待遇の手段によってのことであったが、これに対して、

⑨ 雨が降っていますよ。

⑩ そうでございますか。

などの傍線部は話題の人物に対する待遇というような間接的な手段によってではなく、むしろ「話手が話の場面の聞手に対して抱く敬意を最も直接的に表す敬語」であるとし、このような敬語を「聞手尊敬」と呼んでいる。

そして、従来のいわゆる「丁寧語」がこれであり、時枝説の「聴手への敬意の直接的表現」がこれであるとし、いままでの話題の人物に対する待遇を表す敬語との重大な相違点は、⑨⑩の具体例がそうであるように、人物を話題としない話にも使われるという点だとする。

この考え方は、渡辺も説くように、物言いを丁寧にするのに用いられるという点では、従来の「丁寧語」と類似しているが、その物言いが直接に聞手に向けられるということを重視している点から考えると、やはり時枝説の「聴手への敬意の直接的表現」にもっと近いものと見てよいように思われる。

四 話手自身のための敬語 ― 嗜み ―

最後に、渡辺は、「聞手尊敬」の中で「いただきます」などは確

かに聞手への敬意を示すものと言い切ってもよさそうだが、「です」「ます」は、たとえば、デパートの売り子やタクシーの運転手などを聞手とする場合の、

⑪ このネクタイいくらですか。

⑫ おつり持ってますね。

のように、必ずしも聞手に対して抱く「敬意」を表現するものではなく、むしろ「このネクタイいくらかね」とか「つり銭持ってるね」とかのように、無敬語で話すことはあまりぞんざいであるという話手の意識によって使われるものでもありとし、このような敬語を、「話手が自分の言葉の嗜みとして他人への敬意とは無関係に用いる敬語」との解釈とともに「嗜み」の敬語と呼んでいる。

すなわち、「です」「ます」の敬語には、話手が実際に聞手に対して敬意を表すのに使われるものと、無敬語ではあまりぞんざいであるという意識によって使われるものがあり、前者の場合が「聞手尊敬」の敬語で、後者の場合が「嗜み」の敬語だということである。

話手の表現に実際に敬意があるかないかによって、「です」「ます」の敬語を二種類に分けようとする渡辺の意図は十分納得できる。しかしながら、これははたして「です」「ます」の敬語に限る問題なのであろうか。つまり、敬語とは必ずしも話手の敬意を表しているものであろうかということは、「です」「ます」の敬語だけでなく、敬語運用全般にかかわる問題なのである。この問題

に関連し、辻村敏樹は次のように述べている。

……今日の敬語の使いざまを見ると、敬語が真に敬意を以て用いられていることはむしろ稀であり、それは上下・親疎・恩恵の授受等々の関係によって用いられているのである。……もつと厳密に言えば、そのような認識をした場合に敬語を用いると言うことができるのである。ところが、そういう人に対して、表現主体は必ずしもいわゆる敬意を持っているとは限らないのである。

このように、敬語とは常識的に「敬意を表す言葉」であると認識されているが、実際に行われる敬語現象には必ずしもそれに「いわゆる敬意」が含まれているとは限らないのである。

したがって、渡辺のように「です」「ます」の敬語を二種類に分けようとしても、実際にはその分け目となる敬意のあるなしの区別はきわめて曖昧であらうし、たとえ区別して分けたとしても、右のような事実を考えると、現実的にはあまり意味がないように思われる。それに、「嗜み」の敬語も、聞手に対する敬意までとは言えないかもしれないけれども、どういう配慮によってであるうが、少なくとも無敬語で話すよりは聞手を待遇しているのである。

このように考えると、「です」「ます」の敬語は、渡辺の用語で言うなら、「聞手尊敬」という「まとまりの敬語として扱った方が現代敬語の成り行きに沿った分類ではないかと思われるが、いかがであらうか。

なお、渡辺は、「お手紙」「御返事」などの「お」「御」についても、「お大根」「御飯」のような「お」「御」一般の用法を通じて、話手の嗜みによる敬語、あえて言うならば話手自身のための敬語と解釈すべきだとしているが、この見解にもやはり議論の余地があるように思われる。

というのは、「お大根」「御飯」における「お」「御」は、話手が自分の言葉の嗜みとして、他人への敬意とは無関係に用いる敬語で、まさに渡辺の言う「嗜み」の敬語に属するものと思われるが、「お手紙」「御返事」における「お」「御」は、他人への敬意とは無関係に用いる敬語とは思われなからである。これらの「お」「御」は、たとえば、

⑬家に帰ったら、先生からのお手紙が届いていた。

⑭明日までに御返事をお願いいたします。

などのような例からも分かるように、やはり他人への敬意を表すものと見るべきであろう。

要するに、渡辺の説く「話手が自分の言葉の嗜みとして他人への敬意とは無関係に用いる敬語」としての「嗜み」と認められるのは、「お大根」「御飯」における「お」「御」のようなものに限られると思われるが、もし「嗜み」をこのようなものに限るとすれば、「嗜み」は、辻村の提唱以来多くの人に指示されるところとなっている「美化語」の概念と脈絡をいっしょにするものと言えよう。

五 おわりに

以上、渡辺実の「敬語体系」を概観・分析しながら、筆者なり
の考えを述べてみた。

渡辺敬語論の特徴は、敬語の本質の把握を敬意の向けられる対象において求めている点、現代敬語は聞手を度外視して用いられることはないとし、聞手を重視している点などにあると言える。

特に、従来のいわゆる「謙讓語」を「受手尊敬」と「謙遜」の敬語に分け、「謙遜」を聞手への敬意の表現としてとらえているところは、その本質を的確に把握した注目すべき見解と言えよう。

しかし、敬語現象は決してそれ自体文法現象ではないとする点（本稿では触れなかったが）、敬語運用全般にかかわる問題を一つの敬語現象としてとらえ、それを下位分類に限り適用させている点などは、すでに述べたとおり、敬語の本質を正しく把握した妥当な見解とは言えないように思われるが、いかがであろうか。

注(1) 渡辺実『国語構文論』（塙書房、一九七二）四二一―四四二頁。

(2) 筆者は、敬語現象には文法的事実としての側面もあると考えているが、その点については、すでに拙稿「詞の敬語・辞の敬語」（辻村敏樹教授古稀記念『日本語史の諸問題』明治書院、一九九二）で述べたので、ここでは省略する。

(3) 北原保雄「解説」『論集日本語研究9 敬語』有精堂、一九七八

二九九―三〇〇頁。

(4) 松下大三郎『改撰標準日本文法』中文館、一九二八（勉誠社復刊、

一九七四)。

金田 一京助「敬語法上の一つの問題——目的格への敬称について——」(『日本文学論究』七 国学院大学国文学会、一九五一。

『論集日本語研究』9 敬語』に所収。)

馬淵和夫「古文の文法」武蔵野書院、一九六三。

(5) 山田孝雄「敬語法の研究」(宝文館、一九二四(一九八一復刊))
三九頁。

(6) 「謙称」には称格の概念が含まれており、厳密に言えば、三分説における「謙讓語」とは性質が異なるものであるが、
謙称は他に対して謙遜する意をあらはす語にして……

(『敬語法の研究』一五頁)

という説明からも分かるように、「謙称」から称格の概念を除けば、
いわゆる「謙讓語」と同質のものと考えられるので、ここでは同一
視して扱った。

(7) 辻村敏樹「敬語分類の問題点をめぐって」(『国文学研究』第九四
集 早稲田大学国文学会、一九八八・三)

(8) 時枝誠記『国語学原論』(岩波書店、一九四二)四四一頁。

(9) 辻村敏樹「日本語の敬語の構造と特色」(岩波講座日本語4 敬
語)岩波書店、一九七七)四八頁。

〔付記〕

本稿は、一九八七年度の辻村敏樹先生の演習で「渡辺実氏の敬
語体系に関する私見」という題で発表したものを修正・補充した
ものである。当時、辻村先生には貴重なご教示を賜った。記して
謝意を表したい。